



鳥取市の事例

今月 10 日、平成 26 年に続く二度目の鳥取市職員研修に招かれました。午前の研修のため前日入りしましたが、夜には県下全域に大雪警報が出され、翌朝は一面の雪景色。飛行機も欠航になったため、研修を終えたら早々と在来特急に乗り込んで、緊急脱出となりました。その後も雪は降り続き、91cmも積もって 33 年ぶりの大雪となったそうですが、そんな厳しい環境にある鳥取市の公共施設マネジメントの取組は、3年前とは見違えるように進んでいました。

雪の下から

まず、本市と鳥取市を比較してみます。右表のとおり、人口は、本市よりも 3 万人弱多いものの、可住地の面積は 4 倍以上。したがって人口密度は本市より低くなりますので、前号でも解説したとおり、

住民一人当たりのハコモノ面積が本市の 2.16 倍と多くなることは、当然と言えます。しかし、市民一人当たりの実質の歳入は、本市の 1.65 倍しかなく、今のままでは、本市より厳しい更新問題に直面することは明らかです。

そんな鳥取市が進めてきた取組の一部を御紹介します。まず、上の写真は、本市と同じく郵便局とのコラボです。平成の大合併に伴い、支所となった旧役場に生まれた空きスペースを郵便局に賃貸し、地域における住民サービスを維持するとともに、賃貸料収入を得ています。

次は下の写真ですが、廃校舎を植物工場に転換した例です。学校施設は、ハコモノの中でも最も多くを占め、特に過疎化が進んだ地方では、廃校にした後の転用などが悩みの種です。鳥取県との連携の下、葉野菜の栽培と加工を行う工場に転換して、地域の障害者の雇用も促進するそうです。

	鳥取市	秦野市
住基人口(H27.1.1)	193,064 人	164,366 人
可住地 ¹ 面積	213.09 km ²	49.57 km ²
可住地人口密度	906 人/km ²	3,316 人/km ²
ハコモノ(H26:行財)	865,451 m ²	340,509 m ²
一人当(H27.1.1 住基人口)	4.48 m ² /人	2.07 m ² /人
一人当たり実質歳入 ² (H26)	48.3 万円/人	29.1 万円/人



¹ 市域の面積から、森林や湖沼などの人が住めない部分の面積を除いた面積。本市の場合、市域の面積 103.76 km²に対して可住地の面積は、49.57 km²となる。

² 歳入から基金繰入金を除き、住民基本台帳人口で除したものの。

そして右の上の写真は、高齢者福祉施設(デイサービス)と保育所の複合化です。土地の効率的な利用、一体的な管理による施設運営の効率化、園児と高齢者のふれあいによる効果などを見込みます。また、右の下の写真のように、施設の不具合を早期発見するためのドローンを活用した建物の点検など、すでに本市の先を行く取組もありました。

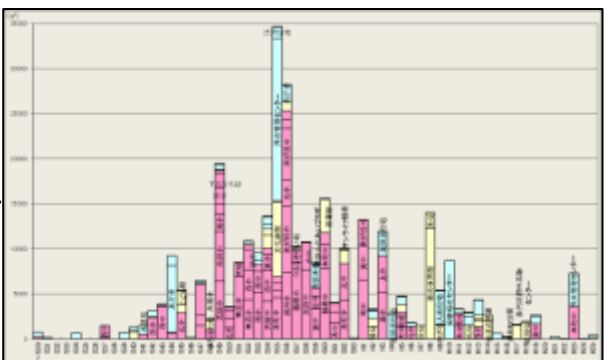
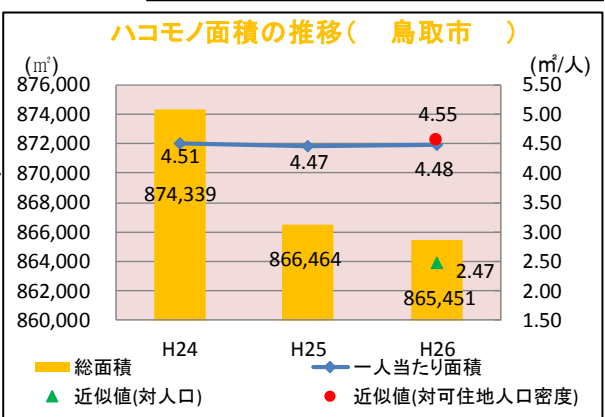


こうした努力もあって、鳥取市のハコモノ面積は、真ん中の図に示すとおり減少傾向にあり、平成26年度は平成24年度と比較して約9千㎡減っています。しかし、一人当たりの面積に目立った変化はありません。ハコモノが減るペースと人口減少のペースが同じくらいになっているためです。したがって、市民一人当たりの負担を減らしていくためには、よりペースアップする必要があります。

そして、本市と鳥取市の最大の違いは、ハコモノの整備時期にあります。いつ、どれくらいハコモノが建てられたかを表す下の二つの図をご覧ください。上が本市、下が鳥取市です。

本市の集中整備の山は、昭和50年代を中心とした一つですが、鳥取市には二つ目の山があります。地方都市にはよく見られる現象ですが、バブル崩壊後の国の景気対策により、公共事業が誘発されて起きた現象といわれています。しかし、この二つ目の山が持つ意味は、今のままではおよそ10年の間をおいて、2度目の更新問題が起こるということです。

あらゆる面において、本市よりも条件が厳しい鳥取市ですが、今や公共施設マネジメントの分野では、トップグループの一員になったと思います。鳥取市の取組は、ボトムアップ型に見受けられます。過去のハコモノ整備には何の責任もない世代の職員の熱意が、積もった雪を溶かしています。春にはきっと芽が出て、大きく育っていくに違いありません。



※ 本文中の写真は、鳥取市様から提供していただきました。

